

プロジェクト型英語プログラムにおける 実践的 ICT スキル・トレーニング導入の試み

木村修平*1

Email: kimuras@fc.ritsumeai.ac.jp

*1: 立命館大学言語教育センター

◎Key Words プロジェクト型英語教育, ICT スキル, 情報教育

1. はじめに

本研究では、立命館大学スポーツ健康科学部の1年次外国語必修科目であるプロジェクト発信型英語プログラムの授業において、タスクや課題に応じたICTスキル・トレーニングを有機的に組み込んだ実践結果について報告する。2012年度に行った計4回のアンケート結果は、学習者の能動的な学びを原動力とするプロジェクト型英語教育の学習プロセスにICTスキルを習得する実践的な機会を配置することにより、発信型の英語能力の涵養と基本的な情報リテラシーの育成の両方が同時に達成できることを示唆している。本研究の意義は、発信型英語教育にICTスキル・トレーニングを組み込むという、高等英語教育の新たな可能性を提示している点である。

本稿の第2章では、本研究の背景として、立命館大学スポーツ健康科学部および同学部の必修英語カリキュラムである「プロジェクト発信型英語プログラム」について概説した上で、本研究で検証する仮説に言及する。第3章では、同プログラムの1年次授業にICTスキル・トレーニングの機会をどのように組み込んだのかを具体的に示す。第4章では、2012年度に計4回に渡って実施したアンケート調査について、その概要と主な回答結果を報告する。最後に、今回の試みの有効性を検討し、今後の主要な課題点を示す。

2. 研究の背景：立命館大学スポーツ健康科学部 およびプロジェクト発信型英語プログラム

ここでは、今回の試みに至った背景として、立命館大学スポーツ健康科学部および同学部の英語カリキュラム「プロジェクト発信型英語プログラム」について概説し、最後に本研究で検証する仮説に言及する。

2.1 立命館大学スポーツ健康科学部

立命館大学スポーツ健康科学部は、2010年4月に同学びわこ・くさつキャンパス(BKC)に開学した、立命館大学で最も新しい学部である。1学年の学生数は約220名で、2013年度の入学者(4期生)をもって学部4学年がすべて揃うことになる。発表者は、同学言語教育センターに所属する外国語嘱託講師として開学時から1年次、2年次の必修英語授業を担当している。

2.2 プロジェクト発信型英語プログラム

同学部では、1年次と2年次のそれぞれに必修英語授業を有しており、そのカリキュラムは「プロジェクト発信型英語プログラム」(Project-based English Program)と呼ばれる。同プログラムは、スポーツ健康科学部に先立って2008年4月に開学した生命科学部・薬学部で実施されてきたカリキュラムである¹⁾。同プログラムの特徴は、学習者が自分自身の関心に基づいて選定したトピックについてリサーチを行い、その成果をアカデミック・フォーマットにのっとして英語で発信するという、能動的かつ実践的な言語運用能力の涵養に主眼を置いている点である。

2.3 プロジェクト発信型英語プログラムとICT

プロジェクト発信型英語プログラムのもう一つの大きな特徴は、授業内外でのICT活用を学生に積極的に推進している点である。たとえば、同プログラムでは学生自身のノートパソコンの持ち込みを奨励し、学内無線LANに繋がった状態で授業に参加することを事実上の前提としている¹⁾。これにより、学生はICTを英語学習にとどまらず知的生産の基本ツールとして用いる習慣を身につけることが期待される²⁾。

同プログラムの書き込み型テキスト²⁾にはICT活用を促す記述が要所々々に見受けられるが、紙幅の都合上、あくまでも一般的な記述にとどめられている。前後期各15回、計30回の講義のどこでどのようなICTスキルを教授するかは各教員の裁量に委ねられている。そこで今回の試みでは、同学部でプロジェクト発信型英語プログラムに携わる3名の教員の一人の立場から、「発信型英語能力の養成と基本的なICTスキル・トレーニングの習得は両立しうる」という仮説を具体的に検証することにした。

3. 発信型英語授業へのICTスキル・トレーニングの組み込み

ここでは、プロジェクト発信型英語プログラムの1

¹⁾ ノートパソコンを持っていない、あるいは持って来ることができない学生については学部であらかじめ購入してあるノートパソコンを貸し出している。しかし、4.2に見るように、学生のノートパソコン所持率は4月の段階で83%以上、7月の段階では90%を超えている。

²⁾ プロジェクト発信型英語プログラムについて、より詳しくは同プログラムのWebサイトを参照。: <http://www.pep.sk.ritsumeai.ac.jp/>

回生配当授業において、ICTスキルの養成に繋がる機会をどのように組み込んだのか、実際に試みたものうち主要なものを前期、後期それぞれについて示す³。

3.1 前期授業 (P1) での試み

プロジェクト発信型英語プログラムの1回生前期授業は「プロジェクト英語1」(以下、P1)と呼ばれる。P1では、学生は日常生活の関心事をテーマにリサーチを重ね、その成果を自分自身と関連づけて英語で口頭発表する(セルフ・アピールする)ことが求められる。

表1は、P1の授業回とテーマ、および各回で取り上げたICTスキル・トレーニングに繋がる要素の一部である。

表1 P1における主なICTスキル・トレーニング要素

授業回とテーマ	ICTスキル・トレーニング要素
Unit 1. ウォーミング・アップ 1(自己紹介と他 己紹介)	<ul style="list-style-type: none"> • ノートパソコン持ち込み推奨 • ノートパソコン購入ガイド⁴ • 学内無線LAN接続方法 • Twitter利用の推奨および教員のアカウント通知 • タッチタイピング練習サイトの紹介
Unit 2. ウォーミング・アップ 2(自己アピール)	<ul style="list-style-type: none"> • Webブラウザの種類と拡張機能の紹介 • Google Chromeの使い方とGoogle検索の基本
Unit 3. リサーチ・スキルズ1 (リサーチとは?)	<ul style="list-style-type: none"> • ノートパソコンの画面を教室設置のスクリーンに外部出力する方法 • コピー、ペースト、カットなどの基本ショートカットキー
Unit 7. プレゼンテーション1 (オーラル・プレゼンテーションのための原稿)	<ul style="list-style-type: none"> • 動画やPDFファイルの一部をPowerPointなどのスライドに取り込むのに役立つ、スクリーンショットの保存方法
Unit 11. プレゼンテーション5(質問をして答える(2))	<ul style="list-style-type: none"> • テキストボックスを使って日本文語図表を簡便に英語化するテクニック • オブジェクトのグループ化

P1は、その後続くP2、そして2回生配当科目(P3およびP4)に繋がる最初の授業として位置づけられているため、英語発信能力の基礎はもちろんのこと、ICTへの基本姿勢を形成する上でも重要であると言える。

³ 今回の試みの詳細は、コースポートフォリオにまとめて京都大学高等教育研究開発推進センターのサイト(MOST)で公開されている。: <https://most-keep.jp/keep25/toolkit/html/stitch.php?s=641057941728326>

⁴ プロジェクト発信型英語プログラムでは、スポーツ健康科学部、生命科学部、薬学部の新入生に向けてノートパソコン購入ガイドを独自に作成しており、現在は2013年度版が「新入生のためのスタートアップサイト」で公開中。: <http://www.ritsumeai.ac.jp/startup/bkc/>

そのためP1では、基礎的なICTリテラシに関わる要素やプレゼンテーションに関わる要素を盛り込んだ。

Twitterについては、授業関連情報の通知手段として発表者個人が2010年度より実験的に使用している。学生によるTwitterのアカウント所持率は近年急速に高まっており、プライバシーや個人情報に関わらない限り、情報の伝達や課題に関する質問の受け付けと回答をTwitterで行うことは、教員と学生双方にとって情報共有にかかる労力の大幅な軽減と共有効率の大幅な向上に繋がる可能性がある⁵。

3.2 後期授業 (P2) での試み

1回生後期授業である「プロジェクト英語2」(以下、P2)では、P1に引き続き、学生は自分の関心事についてリサーチを進め、その過程で種々の英語文献を読みサマリーを書く訓練を中心的に行う。また、リサーチ・メソッドの実践的学習としてアンケートやインタビューを行う。最終的にリサーチの成果をエッセイ形式でライティングし、それに基づいて口頭でプレゼンテーションを行う。

表2は、P2の授業回とテーマ、および各回で取り上げたICTスキル養成のための要素の一部である。

表2 P2における主なICTスキル・トレーニング要素

授業回とテーマ	ICTスキル・トレーニング要素
Unit 16. リサーチ・スキルズ5(プロジェクトの立ち上げ)	<ul style="list-style-type: none"> • タッチタイピング習得の重要性を再度強調し、練習を推奨 • 相互添削型の語学学習 SNS「Lang-8」の紹介
Unit 17. リサーチ・スキルズ6-1(リサーチの準備(1))	<ul style="list-style-type: none"> • 遠隔操作ウィルス事件を取り上げ、ウィルス対策方法を紹介。大学のウィルス対策ガイドラインに基づいて注意喚起
Unit 18. リサーチ・スキルズ6-2(リサーチの準備(2))	<ul style="list-style-type: none"> • Webサービスを使ったアンケートの取り方として、Googleドライブのフォーム機能などを紹介
Unit 24. リサーチ・スキルズ8-2(リサーチの準備(4-2))	<ul style="list-style-type: none"> • VPN接続による図書館データベースの学外からの利用 • Dropbox⁶などのクラウド・ストレージ活用の推奨
Unit 25. リサーチ・スキルズ9-1(リサーチの準備(5-1))	<ul style="list-style-type: none"> • Wordを使った構造化文書作成の基本として、スタイルと書式の基本を紹介 • 図表番号と相互参照の使い方
Unit 26. リサーチ・スキルズ9-2(リサーチの準備(5-2))	<ul style="list-style-type: none"> • ETSが提供する英語自動添削サービス「Criterion」⁷(有料)の使い方を示し、実際に各学生が添削を行った

⁵ Twitterのタイムラインで授業に関する情報が見落とさないための工夫として、今回の試みでは後期授業(P2)から授業用ハッシュタグ(#rits_eng_p2)を使用した。

⁶ Dropbox: <https://www.dropbox.com/>

⁷ Criterion Writing Evaluation: <https://criterion.ets.org/>

P2 では、ライティングを中心に行うため、それに関連した ICT スキルのトレーニングに重点を置いた。特に、タッチタイピングについては P1 に引き続いて練習を促した。これは、4.6 で示すように、情報リテラシの基礎的要素と考えられるタッチタイピングの習得率が入学直後で 15%程度と低調だったためである。さらに P2 ではリサーチに役立つ様々な Web サービスや学内サービスを紹介したほか、リサーチの成果をエッセイ形式のライティングにまとめる後半授業では Word による構造化文書作成の基礎的なスキルを紹介した。

3.3 2 回生授業 (P3, P4) を見据えて

前 2 節で示した ICT スキルは、1 回生授業 (P1, P2) を終えた後の 2 回生授業 (P3, P4) にも応用できるよう配慮した。

すなわち、2 回生前期授業 (P3) では 4~5 名のグループによってリサーチをすすめ、ディベートやパネル・ディスカッションを行うが、その際、たとえば Google ドライブを用いてのドキュメント同時編集や Dropbox のようなクラウド・ストレージを用いてのファイル共有はグループ・ワークの効率化に役立つと考えられる。

また、2 回生後期授業 (P4) では P3 同様 4~5 名のグループでリサーチを進め、P2 よりも高度な英文リサーチ・ペーパーを書くことが求められる。そのため、Word などのワープロソフトに共通する構造化文書作成のノウハウを P2 の段階で習得しておくことは P4 での共同タスクを円滑に進めるのに役立つと考えられる。さらに、P4 のペーパーでは一人につき 1,500 words が達成要件となるため、英文添削サービスの Criterion の使い方に慣れる機会としても P2 は重要である。

4. アンケート調査の結果について

本章では、2012 年度の P1 および P2 で計 4 回に渡って行ったアンケート調査の概要とその主要な結果を示す。いくつかの項目において学生から能力の向上を認める主観的な評価や高い自己肯定感を示唆する結果が得られた。

4.1 アンケート調査の概要

アンケート調査は、P1 の初回授業 (P1-1) と第 13 週授業 (P1-13)、P2 の 2 週目授業 (P2-2) と最終授業 (P2-15) のそれぞれで計 4 回行った (表 3)。

表 3 4 回のアンケートの実施日と回答者数の内訳

略称	アンケート実施日	回答者数 (クラス数)
P1-1	2012 年 4 月 9 日	96 名 (4 クラス)
P1-13	2012 年 7 月 2 日	89 名 (4 クラス)
P2-2	2012 年 10 月 8 日	214 名 (10 クラス)
P2-15	2013 年 1 月 21 日	197 名 (10 クラス)

P1-1 と P1-13 の回答者数が P2-2、P2-15 に比べて半分以下なのは、P1 のアンケートを発表者の担当クラスのみで実施したからである。P2 では、他の 2 名の英語教員もアンケートに協力してくれたため、スポーツ健康

科学部 1 回生全 10 クラスでの実施が実現した。このため、P1 と P2 と回答者数に倍近くの差異がある点に注意されたい。

4.2 ノートパソコンの所持率および授業持込率

前述のように、プロジェクト発信型英語プログラムでは学生に自分自身のノートパソコンを授業に持ち込むよう奨励している。たとえば 10 年前であれば、ノートパソコンを持っていない学生はまだ相当数存在していたと考えられるが、2010 年以降では複数の調査結果が示すように⁸多くの大学生は入学時点で自分用の、または家族と共用のノートパソコンを所持している⁹。

表 4 に示したのは、2012 年度入学の 1 回生のノートパソコン所持率の推移である。入学直後の段階 (P1-1) ですでに 90% 近くの学生が自分用、もしくは共用のノートパソコンを所持していることがわかる。

表 4 ノートパソコンの所持率の推移

回答項目	P1-1	P1-13	P2-2	P2-15
持っている	80 名 (83.3%)	84 名 (94.4%)	202 名 (94.4%)	186 名 (95.4%)
家族と共用	6 名 (6.2%)	2 名 (2.2%)	7 名 (3.3%)	8 名 (4.1%)
持っていない (近々購入予定)	8 名 (8.3%)	1 名 (1.1%)	1 名 (0.5%)	0 名 (0%)
持っていない (購入予定なし)	2 名 (2.1%)	0 名 (0%)	4 名 (1.9%)	1 名 (0.5%)

表 5 に示したのは、実際に P1、P2 の授業に学生がノートパソコンをどの程度持ち込むのかを示している。多くの学生が「ほぼ毎回持ち込む」と回答していることから、授業内で ICT を活用するというプロジェクト発信型英語プログラムの基本的な方向性は学生と共有されていると考えられる。

表 5 P1, P2 へのノートパソコン持込率の推移

回答項目	P1-13	P2-15
ほぼ毎回持ち込む	83 名 (93.3%)	159 名 (81.5%)
たまに持ち込む	2 名 (2.2%)	22 名 (11.3%)
どちらとも言えない	0 名 (0%)	0 名 (0%)
あまり持ち込まない	1 名 (1.1%)	8 名 (4.1%)
まったく持ち込まない	2 名 (2.2%)	6 名 (3.1%)

4.3 英語による情報発信能力の変化

ここまで ICT に関連した能力に焦点を当ててきたが、P1、P2 は英語科目であり、その主眼は英語発信能力の養成にあることを確認したい。表 6 に示したのは 1 回

⁸ 一例として、近畿大学における「大学生の情報機器利用に関する調査」(2012 年度) がある : <http://www.kindai.ac.jp/130208.pdf>

生最後の英語授業 (P2-15) で自分自身の発信能力や学習意欲の変化を尋ねたものだが、多くの学生が高い自己肯定感を示していることがわかる。

表 6 P1, P2 を終えての英語発信能力や学習意欲の変化
この一年間を振り返って、自分自身の英語による情報発信スキルや学習意欲は向上したと思いますか？

回答項目	P2-15
強く思う	60名 (32.4%)
やや思う	103名 (55.7%)
わからない	18名 (9.7%)
あまり思わない	2名 (1.1%)
全く思わない	2名 (1.1%)

4.4 IT スキルおよび興味関心の変化

IT スキルやIT への興味関心についても多くの学生からポジティブな回答が得られた (表 7)。

表 7 P1, P2 を終えての IT スキルおよび興味関心の変化
この一年間を振り返って、自分自身の IT スキルや IT への興味関心は向上したと思いますか？

回答項目	P2-15
強く思う	48名 (26.2%)
やや思う	89名 (48.6%)
わからない	38名 (20.8%)
あまり思わない	4名 (2.2%)
全く思わない	4名 (2.2%)

前節の英語発信能力の伸長への高い肯定的な評価と併せて考えると、今回の試みには一定の成果があったと言える。

4.5 向上を感じた具体的な IT スキル

表 8 は、P1, P2 を通じて具体的にどのような点で学生が IT スキルの伸長を感じているかを示している。

表 8 伸長を感じる具体的な IT スキル

回答項目	P2-15
インターネットを使ったリサーチや情報収集の能力アップ	87名 (44.2%)
PowerPoint などを使ったプレゼン資料の作成スキル向上	114名 (57.9%)
Word などを使ったペーパーや文書の作成スキル向上	85名 (43.1%)
DropBox などのクラウド型サービスを使った学習効率アップ	44名 (22.3%)
パソコンやスマートフォンについての全般的な理解の向上	55名 (27.9%)
家族や友人で IT に関する話題をすることが増えた	13名 (6.6%)
ネットやアプリなど IT を使って英語学習する機会が増えた	11名 (5.6%)

プレゼン資料の作成スキルに多くの学生が向上を見出しているのは、P1, P2 でプレゼンをする機会が多かったためと考えられる。インターネットを使ったリサーチ能力の向上については、ノートパソコンを授業に持ち込み、学内無線 LAN を用いてインターネットに接続して授業内でリサーチを行うことが 1 年間を通じてほぼ習慣化した結果ではないかと推測される。

4.6 タッチタイピング習得率の変化

最後に、やや蛇足ながらタッチタイピングの習得率の推移を表 9 に示す。PC Conference 2012 でも理系大学におけるタッチタイピングの習得率の低さが報告されていたが³⁾、印象に基づく私見ながら、日本の大学生は諸外国の同年代の若者と比べて基本的な入力デバイスである QWERTY 配列のキーボードに不慣れであり、それが ICT への苦手意識の温床となっている可能性がある。これについては今後の研究を待ちたい。

表 9 タッチタイピングの習得率の推移

回答項目	P1-1	P1-13	P2-2	P2-15
できる+	15名	29名	48名	55名
ほぼできる	(15.7%)	(32.5%)	(22.5%)	(33.1%)
できない	81名	60名	165名	131名
	(84.4%)	(67.4%)	(77.5%)	(66.8%)

5. おわりに

プロジェクト発信型英語プログラムは、学生の発信を中心に、様々な可能性を見せてくれる大変興味深いカリキュラムである。前章 4.3, および 4.4 のアンケート結果から、「発信型英語能力の養成と基本的な ICT スキル・トレーニングの習得は両立する」という仮説は、少なくとも学生による主観的評価に基づいて考えるのであれば、成り立つと言えるのではないだろうか。このことは、昨今の大学教育改革、中でも高等英語教育の改革を巡る議論に一石を投じるものと考えられる。

今後の大きな課題としては、P1, P2 で学んだ ICT スキルが P3, P4 の授業タスクで効果的に活かされているかを検証する必要がある。

謝辞

今回のアンケート調査や各授業の教案作成にあたり、祐伯敦史先生 (立命館大学スポーツ健康科学部) ならびに山本好比古先生 (同学言語教育センター) に多大なご協力を賜った。心から謝意を表したい。

参考文献

- (1) 鈴木佑治: “立命館大学生命科学部・薬学部 「プロジェクト発信型 英語プログラムー Project-based English Program」の理論的基盤と実践”, 立命館高等教育研究, 第 10 号, pp. 43-61 (2010) .
- (2) 鈴木佑治: “プロジェクト発信型英語 Do Your Own Project In English Volume 1”, 南雲堂 (2013) .
- (3) 辰巳丈夫, 松葉哲史: “これからの大学生に必要な情報フルーエンシーを目指したパソコン講習会”, PC Conference 2012 論文集, pp. 359-362 (2012) .